

伊勢湾再生海域推進プログラムについて

1. 策定の経緯

平成19年3月に、「人と森・川・海の連携により健全で活力ある伊勢湾を再生し、次世代に継承する」ことをスローガンとした“伊勢湾再生行動計画”が策定された。“伊勢湾再生行動計画”の「V. 行動計画のフォローアップ」に示されているとおり、伊勢湾再生を推進するための海域での取組みを具体化したものを『伊勢湾再生海域推進プログラム』として策定した。

『V. 行動計画のフォローアップ』（伊勢湾再生行動計画 抜粋）

各機関、検討会等においては、これまでに実施及び今後予定されている施策を実行するとともに、必要に応じて本行動計画を具体化した推進プログラムを定める。

2. 策定機関と策定期間

○策定機関：伊勢湾再生海域検討会

○策定期間：平成18年3月～平成20年3月（2年間）

『伊勢湾再生海域検討会』とは、“伊勢湾再生推進会議”において採択された基本方針を受け、海域の観点から行動計画に反映すべき目標や施策などを具体的に検討していくために設置された組織。

3. 伊勢湾再生海域検討会メンバー

学識経験者、漁業関係者、市民・NPOなどにより構成されている。

氏名	部署	和出 隆治	愛知県漁業協同組合連合会
中田 喜三郎	東海大学	井村 篤司	三重県漁業協同組合連合会
前川 行幸	三重大学	小田 正宣	東三河懇話会
青木 伸一	豊橋技術科学大学	古瀬 達夫	三河湾浄化推進協議会
千頭 聡	日本福祉大学	辻 淳夫	伊勢・三河流域ネットワーク
中村 由行	(独)港湾空港技術研究所	久米 広毅	NPO法人 阿漕浦友の会
鈴木 輝明	愛知水産試験場	永田 桂子	NPOシーブリーズ三河湾
藤田 弘一	三重県科学技術振興センター	丹羽 徳子	NPO法人 伊勢湾フォーラム

伊勢湾再生海域推進プログラムの構成について

伊勢湾海域の過去から現在に至る状況

伊勢湾海域において何を再生すべきなのかを明確にするために、伊勢湾海域の過去から現状に至る状況をレビューした。

伊勢湾再生に必要な視点

過去から現状に至る状況のレビューを踏まえて、伊勢湾海域の個性を重視した再生に必要な視点について概説した。

伊勢湾海域環境の主要課題

上記のイメージを実現させるために、伊勢湾海域の3つの主要課題（①多様な生物がいきづくうみの保全、②人々の海の利用をさまたげるゴミの抑制、③人々の海に対する理解・関心の向上）を取り上げた。

目指すべき伊勢湾の姿

主要課題を踏まえ、目指すべき伊勢湾の姿を「豊富で多様な生物を産み出す海」と「ゴミが少なく人々が利用しやすい海」、「人々が親しみやすい海」の3つとした。

伊勢湾再生のための海域での取組みと具体的な目標

- ・『豊富で多様な生物を産み出す海』にするためには、貧酸素水塊の抑制と生物資源量の回復により、伊勢湾の多様性を取り戻していく必要がある。また、生物資源量の回復と併せて、それらを漁獲として系外へ取り出すための仕組み（＝漁業など）も健全な姿とすべきである。
- ・『ゴミが少なく人々が利用しやすい海』にするためには、現時点でボトルネックとなっている箇所が明確となっていないことから、まずはこの点から明らかにしていく必要がある。
- ・『人々が親しみやすい海』にするためには、ニーズにあった場の整備とともに、質の向上や伊勢湾民の目を海に向けるための施策が必要である。

“目指すべき伊勢湾の姿”を手に入れるための具体的な目標を設定した。

伊勢湾再生推進のシナリオ

様々な個別の検討や対策が必要であり、それらを推進する際のシナリオを検討した。環境という予測困難な事象を対象とした取組みであるため、施策実施中及び実施後の検証結果によってはシナリオやプログラムを順応的に見直すことが必要となる。そこで、個々の対策スタート後のフォローアップ方法について検討した。

伊勢湾再生のための海域での取組みと具体的目標

『豊富で多様な生物を産み出す海の姿』

【取組1】 “貧酸素水塊の抑制”と“生物資源量の回復”

【目標】 伊勢湾が健全な状態であったといわれている昭和30年代初頭の貧酸素水塊の状態や生物生産量に出来るだけ回復させる。

【指標】 農林水産統計に記載されている底生性の魚介類（例えば、伊勢湾産のハマグリなど）の漁獲量

※) 施策: 浅場(干潟)の造成、藻場の造成、深掘跡の埋戻し、モニタリング

【取組2】 漁業を通じた栄養塩の回収

【目標】 栄養塩の回収量を増やすこと

【指標】 農林水産統計に記載されている全魚介類（伊勢湾産）の漁獲量

※) 施策: 漁業を通じた栄養塩類の回収

『ゴミが少なく人々が利用しやすい海の姿』

【取組3】 ゴミの少ない海の再生

【目標】 ゴミの少ない海の再生のボトルネックとなっている問題を明らかにする。

『人々が親しみやすい海の姿』

【取組4】 環境学習の実施

【目標】 環境学習をできるだけ多く実施すること

【取組5】 海にふれあう機会・場の創出

【目標】 市民のニーズにあった機会や場の提供を増やすこと

【取組6】 海に対する結びつきの強化のための広報・PR

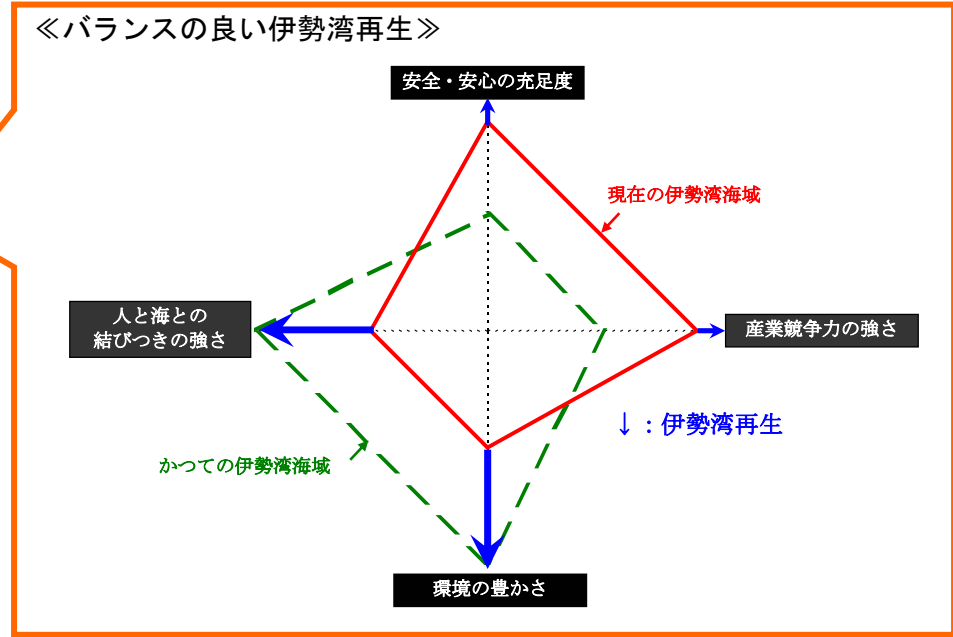
【目標】 伊勢湾の現状や問題点の意識を一般の人々に浸透させること

伊勢湾再生に必要な視点

「安全・安心」、「産業競争力」、「環境」、「人と海との結びつき」といったさまざまな面での“伊勢湾の豊かさ”をバランス良い形に再生すること

目指すべき伊勢湾の姿

- ① 豊富で多様な生物を産み出す海の姿
 - ② ごみが少なく人々が利用しやすい海の姿
 - ③ 人々が親しみやすい海の姿
- ほうじょう 豊饒な宝の海を取り戻す



プログラム策定の流れ

伊勢湾海域の過去から現在に至る状況	伊勢湾海域再生の主要課題	取り組み		シナリオ	推進の流れ
			目標		
安全・安心 産業競争力 環境 人々の関心	多様な生物がいきづくうみの保全	貧酸素水の抑制と生物資源量の回復	伊勢湾が健全な状態であったといわれている昭和30年代初頭の貧酸素水の状態や生物生産量にできるだけ回復させる	浅場（干潟）の造成	シミュレーションの実施→造成材の確保（実現可能な事業の実施）
		漁業を通じた栄養塩の回収	栄養塩の回収量を増やす	藻場の造成	シミュレーションの実施（実現可能な事業の実施）
	人々の海の利用をさまたげるごみの抑制	ごみの少ない海の再生	ごみの少ない海の再生のボトルネックとなっている問題を明らかにする	深掘跡の埋戻し	深掘跡の把握調査→埋戻し施工量の設定
安全・安心 産業競争力 環境 人々の関心	伊勢湾民の海に対する理解・関心の向上	環境学習の実施	環境学習をできるだけ多く実施する	モニタリング	モニタリング体制の検討→実施主体の検討→伊勢湾民の環によるモニタリングの検討
		海にふれあう機会・場の創出	市民のニーズにあった機会や場の提供を増やす	漁業を通じた栄養塩の回収	伊勢湾産魚介類のブランド力の強化→地産地消の検討
		海に対する結びつきの強化のための広報・PR	伊勢湾の現状や問題点の認識を一般の人々に浸透させる	ごみの少ない海の再生	ごみの種類調査→ボトルネックの検討
				広報・PR	コンテンツの作成→指導者の育成→“伊勢湾環境マイスター制度”の仕組みづくり
				海にふれあう機会・場の創出	ニーズの検討→管理手法の検討
				広報・PR	内容の検討